文芸

俳句

山門の見えて百段額の花　池田　逸子

災害の深手未だの三夏かな　伊藤　敬子

無縁仏供花一輪盆の墓　伊藤　定男

流星や消えし友の手導き手　今関満喜子

軒下に遊びの後の浮輪かな　魚地　照子

電線の雀らお前も夏痩せか　江森　悦子

秋ざくら墓守絶えし兵の墓　大谷　武彦

盆の月薬屋に揺るる聯古し　川島　孝夫

迎火や吾より若き父母迎う　川島　通則

死の灰に負けてたまるか淩霄花　向後　寛

八十坂やいと懇ろに墓洗う　越川せつ子

玄関に疲れた靴が夏休み　小松　藤男

原発の闇を照して初螢　佐瀬　輝夫

盆用意家風はきちんと狂いなし　鈴木とし子

爺婆のふところ急し夏休み　鈴木　利子

蜩やみ社の森鎮まりて　玉虫　栗扇

迎え火や母の足音門を入る　土屋美枝子

鬼の面外せば笑みて玉の汗　土屋　義昭

晩年とは花野の中を彷徨ひぬ　戸村　静草

満喫すごろ寝が一番夏座敷　西崎さち子

ひとりには余る夕餉の冷し酒　早川　勇

増築は兼ねて念願のサンルーム
明るい日差しを身に受けぬたり　吉岡　信子

九十八の媼の葬儀より帰りし息子
肖れと吾が背撫でてくれたり　青木　秀子

ゆかた着の腰揚げせむと縫ひをれば
幼寄りきて針目を追へり　押尾　輝子

隠れん坊する児等の声聴きてゐむ
校庭に立つ金次郎さんは　西山満里子

夫逝きて独り暮らしも六年目
己励ましCD買ひたり　田崎　尚美

たわひ無き会話に心満たさるる
近くに住める独り居の友　鈴木まさ子

青田にと変はりし田圃穂孕みて
風に大きく波打ち揺るる　平山　芳子

天国の夫に届けと打つ鈴の
朝の仏間に響きゆきたり　芹川　初子

笑ふことの少なくなりしこの日日を
救ひてくるる犬の眼差　八角　三枝

夫の乗る横芝止まりの終電が
闇夜を照らしすべるがに来ぬ　島田　ますみ

葦の芽を抜きてつくりし草笛を
吹きつつ朝の速歩に励む　斉藤　つね子

短歌

街中を破れズボンが闊歩する
この世の変遷老いはとまどう　越川　義則

涼もとめ庭下駄履けば月皓皓
髪膚照らされ文月満月　越川　福子

終戦の八月十五日迎へては
死より生への嬉しさうかぶ　鈴木　益郎

肩肘を張らずに生きよと青田風
低くすがしくわが頬を撫づ　高梨　キヨ

みはるかす青田の風は波打ちて
今年の豊作告ぐるがに見ゆ　土屋　好

こうほう博物館 42

映らない鏡

昭和五十九年、大総新道を造る際、長倉の大宮神社の脇にある塚を発掘調査したところ、銅鏡二面と鉦鼓、銭貨が出土しました。この塚は経塚と言われ、塚の下にお経と共にさまざまな宝物を埋納して、人々の幸福を願ったものと言われ、平安時代から各地でこのような塚が造られました。

長倉から出土した銅鏡は、直径十二センチほどの円形で、青銅で作られ、全体的に分厚く、縁の立ち上がりも高く厚い。そして裏面に彫刻された文様は松、竹、梅に鶴と亀が見られ、このような文様のセットを、吉祥と極楽浄土を表した蓬莱文と呼ばれ、この文様のある鏡を蓬莱鏡と呼ばれます。この蓬莱鏡は安土桃山時代から江戸時代初めに盛んに作られ、長倉の蓬莱鏡も一緒に出土した寛永通宝から、江戸時代前期のものと分かりました。

ところがこの蓬莱鏡、本来は顔を映す表面はほとんど磨かれてなく、本当は鏡として使われなかったのではないかと思ってしまいます。ほかに伝世している同様の蓬莱鏡を見ても、やはり映らないものばかりです。ではなぜこのような鏡が作られたのか、それはこの分厚さが示すように、これは顔を映すために作ったのではなく、宝物として作ったと考えられます。このような宝物の一部は、人々の幸福のため、神仏に奉納し、願ったのかもしれません。

このような町内から出土した鏡や、町内で個人的に所蔵している鏡を集めて、「鏡の歴史展」を今月三日から町民ギャラリーで開催します。古代から現代までのさまざまな鏡を展示しますので、どうぞご覧ください。

▲長倉の経塚から出土した蓬莱鏡